

火野葦平選集

第三卷



火野葦平選集第三卷

東京創元社版

火野葦平選集第三卷

昭和三十三年七月三十日初版

定價五〇〇圓

著者 火野葦平 ひのあしへい

發行者 小林茂

印刷者 田中末吉

東京都新宿區新小川町一ノ一六

東京創元社發行

電話(33)八五一二(代表)

振替東京一五六五

印刷・理想社 製本・鈴木

第三卷 目次

幻燈部屋

第一部 幻燈部屋

四

第二部 神話

六

第三部 新市街

一三

第四部 花扇

一六

第五部 水祭

二二

第六部 夜鏡

二六

海拔四百尺

三〇

河童曼陀羅

石と釘

三七

李 花

三七九

名 探 偵

三八三

魚 眼 記

三八九

千軒岳にて

三九五

昇 天 記

三九八

白 い 旗

四〇一

紅 皿

四〇四

新 月

四一

海 御 前

四三

胡 瓜 と 戀

四三

皿

四四〇

解 説

四五五

火野葦平選集 第三卷

幻燈部屋

第一部 幻燈部屋

第一章

昔、或るところに、山があつた。川があつた。町があつた。森があつた。葡萄園があつた。子供があつた。夜になつて子供は葡萄園に葡萄をちぎりに行つた。月が出て高塔山の天邊の松林が帆船船のように見える。ゆき馴れた山道ではあつたが、晝間の雨のために草履をはいていてもずるずると滑つた。中腹にある葡萄畑にたどりつくくと、半町ぐらい手前からもうふさふさとした葡萄が月の光にきらめき光るのが望み見られた。生唾を噛みなが

ら少年は垣のない葡萄園に入つた。やわらかい葡萄の玉をひとつちぎつて口に入れた。甘酸っぱい丸いものが齒の根にしみとおりにがらくなり咽喉に落ちた。少年はもうひとつちぎつた。すると、とつぜん、背後でばさばさと騒々しく葉をかきわけける音がして、どろぼう、どろぼう、という胴間聲が耳もとで起つた。少年はおどろいて逃げだした。その背中にまたどろぼうどろぼうと呼ばれる聲がして、そのあととは眩きになつた。少年は夢中で走つたために、雨に濡れていた赭土路にこけ、三間位の高さの崖から轉落した。彼はどこかひどく打つて怪我をしたように感じたが、その苦痛よりもどろぼうと呼ばれたことの悲しみの方が深く、唇を噛んで泣かんばかりになりながら家に歸つて來た。おどろいた母はおろおろとあわてて息子の顔の血をぬぐい、頭に繻帶をしてやつたが、少年は母が心配そうに何度きいてもその理由を語らなかつた。その時から數日、少年は家に閉じこもつていた。數日後に、繻帶と顔とがよく見えないように深く學生帽を被り、山にのぼつた。葡萄園に來てみると、葡萄の實はいつそうゆたかに水氣をふくんでたわわに重そうに垂れていた。氣がつくとこの間まではなかつた柴垣が葡萄園の周圍に嚴重に張りめぐらされていた。畑の中に誰かいて、畑の畔を竹箒でしきりに掃いていた。よごれた手拭を首に巻き、その端でときどき鼻水の垂れる

のをぬぐいながら、その小柄な榎栗頭の老人は畔を掃いては踞んで草を掃つた。鼻の頭がインクでもつけたように赤いのはどういふわけであろう。少年は椎の木のかけに身をひそめて、この見窄らしい番人の一舉一動を見つめていた。彼の耳もとでどろぼうと喚いた聲はおどろくほど大きな胴間聲であつたが、やはりこのしよぼしよぼとした老人であつたにちがいない。少年は新しく拵えられた牆垣にはげしい侮辱を感じた。この時、少年の心の中に、思いがけなくも今まで経験したことのないかつた領主としての矜持がふいのごとく湧いた。常には彼は父をはじめとする自分の一家の人達が、いつまでも懣々として抱いている時世はずれの感情を輕蔑していた。しかし、今、この葡萄酒のほとりで、國藏（とその少年の名はいつた）は自分がかつては輕んじたいわけのない矜持にはげしくとり憑かれ、それのみでなく、なにかの時に父や祖母が舌打ちをしながら繰りかえす「町人どもが」という言葉を心の底から呟いたのである。

都に出て繪の勉強をしている弟が兄の肖像を描きたいといつた時、國藏は、この傷を描くかどうかときいた。二十年も前の負傷は成長するとともに黒く鮮かに刻印のように額に残つた。國藏は白面長身、女のように柔和で端麗な青年であつたので、畫家である弟の千吉は強く制

作慾を唆られたのであるが、傷を描くかという兄の言葉になにかうろたえたように動搖し急に返答することが出来なかつた。そういう質問がなければ無論描くつもりであつた。しかし詰問するようにそういわれると、何氣なく描いてしまふような描きかたが憚られた。苦笑して「描かんでおきましょう。」といつた。

「描いてもいいんだよ。」

多くのきょうだいのうちで、國藏と千吉は小さい時から瓜二つといわれた。長身であるということは父祖の體格を受け繼いだのである。若死した兄も、廢嫡された長兄も、姉妹たちでさえ人中で目に立つほど背が高かつた。そのうちで國藏と千吉は雙生兒のように顔容がよく似ていたために、眼の薄くなつた祖母が時々見ちがえた位である。輕なところのある母は二人のことを澁柿甘柿と呼んだ。柿は一見恰好や色などが同じに見えるが、食べてみると、澁柿は澁く、甘柿は甘い。國藏が甘柿で、千吉が澁柿である。しかし、この鑑定はこの兄弟が成長してゆくにしたがつて、狂つていたと皆に思われるようになった。

千吉は故郷の町で個人展覽會を開いた。松茸の出はじめる頃であつた。數年前に貨物船に便乗して支那に渡つたことのある千吉は、その時、主として南京を中心とす

る地方で、或る批評家が、久賀千吉氏が従来の暗鬱な色彩感から脱却してようやく新しい道に出た、といった十數枚の繪を描いた。事變が起る僅かばかり前である。その繪を中心として中支風物畫展とされた。いつたいこの地方は畫家にとつては歎きとされる土地である。明治の初年にはまだ蘆荻蕭々として空氣の澄んだ一江口であつたが、石炭の產出を契機として急激に發展膨脹をした。今は港を圍繞する數百の工場の煤煙のために、晴天の日すら北九州地方は薄暗い霧に包まれる。新しい家屋は三年を経ずして黒ずみ、疊は一日に五度以上も掃除しなければ足の裏はまつ黒になる。樹木は生彩を失ひ、かつては白砂の海濱に常緑を誇つた松並木は年ごとに赤茶けて枯れてゆく。いつか千吉は自分の家の茶の間にかけた自分の油繪を見ておどろいたことがある。それは代々家に傳わつてゐる鎧や槍、刀などを配した八號位の靜物であつたが、それを描いてから二年目に彼は東京から歸つてふたたびそれを見たのである。初め彼はそれが自分の描いた繪とはちよつと思えなかつた。繪具はまつたくどす黒く變色してしまつて、取りはずして洗つてみてももとの色が出ないのだ。彼は自分が生まれ落ちるときから成長して來た土地に、亡靈のごとくしみついてゐる煤煙の恐ろしさをはじめてのようになつた。彼の繪は暗いといわれた。つとめて明かるい色彩を用いるように意識し

ながら、その明色の顔料の底にある妙な暗さをきまつたように指摘された。そうすると彼はそれを常に自分の父祖の生活から受け繼いだ宿命的なものとして理解する。しかしいま變色してゐる自分の繪を見て眼の覺める思いがした。彼が支那へ渡ろうと決心したのはその時である。千吉が畫家になることを、一家の者は、國藏をのぞいては誰も賛成していなかつたために、郷里で展覽會を開くのも一切が他人によつて行われた。帝展入選などの時には新聞に出るので、故郷の人達はまるで久賀千吉の名を知らないわけでもなかつた。同じように畫を勉強してゐる何人かの友人達が、會場の借り入れから、飾付け、案内狀の印刷、ポスターの制作まですっかりやつてくれた。展覽會は公會堂で開かれた。この公會堂の建つてゐる場所は今では町の中央になつてゐるが、二十年ほど前までは町はずれで共同墓地のあつたところである。移轉のために發掘した當時には、無數の人骨が出て來て、怪異があるというのでしばらく町の人は近づかなかつた。そのうちまず十九世紀風な赤煉瓦の公會堂が建ち、家々が立ち並んだ。久賀家の墓所もここにあつたが、このとき千海寺の亂塔場に移された。繪は全部で五十六點、そのうち水彩畫が二十點、大部分は中支那の風景や支那人を描いたものであつた。その中に五十號大の國藏の肖像畫があつた。

セルの着流して白足袋に麻裏まうらをつつかけてぶらりとやつて來た國藏は、自分の肖像畫の前に來て美しい眉をひそめた。その繪は彼が想像して來たよりも出來がよかつた。額の傷は描かれていなかつた。長火鉢の前に坐つて華車きやな指に朱塗りの煙管きやんをつまんでいる様子もよく、銅壺どうの横におかれてある金蒔繪きんしきえの定紋じやうもんつきの茶器も、そのにぶい沈んだ金色がおおどかに見られた。少し赤すぎると思われる唇をのぞいては、端正な顔はこれが自分であろうかと少し氣恥きぢかしい位立派に描かれていた。國藏がしかし眉をよせたのは繪の出來榮えではなく、その繪の題が「或る高利貸の像」となつていて、それが金泥の紙に肉太の字で墨痕鮮かに書かれてあつたからである。

國藏は弟を物色してみたが、さきほどどこかに出て行つたということで會場には見あたらなかつた。

「この繪の題は千吉がつけたんですか。」

と彼は小さい机に坐つている金釧がんせんの學生服にきいた。

「はい、久賀先生がおつけになつたんです。」

町寧にお辭儀をしながらその若い男はいつた。東京からつて來た、行村靜夫という、千吉の弟子である。行村は質問者がこの繪のモデルであることを早くから氣づいていた。

「弟が歸つて來たら、題を變えろと兄がいつたと傳えて下さい。」

「かしこまりました。」

「この繪には賣價がついていないようだが、いくらで賣るのですか。」

「なんでも先生は非賣品のように申して居りましたが。」

「私が買つてやるといつたと傳えてくれませんか。」

「さあ、賣りますかどうか。昨日も、どうしても欲しいといつた方があつたのを斷つて居られたようです。」

「これを買うといつたのは誰です。」

國藏は不審そうに好奇の面持できいた。

「女のひとのようでした。」

「女？　ほう、どんな人ですか。」

「よく憶えませんが……」

「ぜひ私が買うから、夕方にでも家に來るように弟にいつて下さい。」

「かしこまりました。」

國藏が麻裏草履の音を引きずるようにして會場を出ると、入れちがいに千吉が歸つて來た。千吉は袴はかまの裾をはらいながら、大股で二段ずつ玄關の階段を踏んで入つて來た。

「たつた今、お兄さんがお出でになりました。」

「ほう。」

「この繪をぜひ賣つてくれといわれていました。夕方來てくれつて……」

「いや、兄貴には賣らぬ。」

「繪の題を變えてくれといわれて、なにかお機嫌がよろしくないようでした。」

「そうかね。」

千吉は笑つたが、この題が氣になるようでは兄貴も思つたほどでない、軽い氣持になつた。それを見くびつたのではなく親しみが湧いたのである。

國藏が甘柿で、千吉が澁柿と母がいつたのは、多分家を見すてゐるような子供をしぶとい奴という意味であつたのかも知れない。そうすれば長兄の友太郎は大澁柿であるかも知れない。三男である國藏が家を繼ぎ、父の業をすつかり代理するようになったことを、無論父も母も祖母も徳としている。六人のきょうだいのうちで、家に残つてゐるのは國藏といちばん下の妹のとめ子だけである。次兄の友次郎は徴兵検査の年に心臓癰^{よう}膜症のために他界した。千吉ととめ子との間のすゑ子は石川という石炭商に嫁入りし、一番上の姉のいせのも村瀬石炭商に嫁した。敏腕家という折紙のついでに村瀬國藏はもと帆船問屋であつたが、後に石炭商を兼業するようになった。石川欣一に嫁したすゑ子は夫とともに現在名古屋にいた。女の姉妹がいずれも石炭商にかたづいたのは、この町がまず石炭のために發展を始めたことと、石炭商に金

持が多かつたからである。父の善助は金持が好きであつた。町人は嫌いであつたが、町人の金持とは近しくするような矛盾したところがあつたのである。あまり金遣いが荒いので勘當^{かんだう}された長兄の友太郎も、石炭關係の請負師のようなことをして一時は相當金もつくつたらしく、そのような點では父の氣の入らぬこともない。しかし友太郎は風の便りに奉天^{ほうてん}にいるというようなことを聞いたので、今は杳^{よう}として消息がない。あまり子供が出来ないので、千吉の次に女の子が出来た時、もうこれでおしまいだらうとすゑ子という名をつけた。するとまた女の子が生まれた。そこで、とめ子と名づけた。産後に母が大病をし、全快すると身體に變調を來して、その後は妊娠^{くわんご}をしなかつた。古くからかかりつけの漢方醫である馬越先生は、母が產褥熱^{さんじよく}で囁言^{ささやか}をいつていた時には、善助をかげに呼んで、もう駄目だから遺言を聞いておく方がよいといった位である。しかし、善助は自分の父の遺言でしばられた苦い經驗があるのでそれをしなかつた。善助は自分は死ぬときには決して遺言などしないつもりでゐる。一番すえのとめ子は無口な女で二十歳になつても化粧もせず、着物も着たがらず、なにを考へてゐるかもわからず、黙々として女中のように働いた。

久賀筑前守時尙はこの町の小さい領主であつた。今は大きくなつて一つになつたこの町は藩政時代は三つの所

領に分れていた。久賀筑前守の居城は海拔四百尺の高塔山の頂上にあつて、前に洞の海を望み、後に玄海灘を控え、一年中一日も絶えることなく颯々たる松嶺のひびきが聞かれた。

明治になつて西南戦争が終つた頃、落雷のために豆のごとき山上の小城は潰えた。大正の初め頃まで石垣の名残りがとどめられていたが、町が開け、高塔山の頂上が公園化されることになつて、由緒ある石垣はことごとく登山道のバラスとするために碎かれた。久賀家は高塔山の麓に白壁の家を建て、四代目の領主久賀時義は金貨となつた。維新になつて世が草まる以前から、久賀の殿様は代々金融をやつていたといわれる。領地は町の發展とともに急速度に地價を生じ、商工業の發達とともに門には資を仰ぐ者が溢れた。家作も相當にあつた。しかしながら、その外面的な盛業のうちに、やがて久賀家の内部には滔々たる時世を白眼視する苦が生えはじめたのである。

時義は明治元年に生まれた。彼がまだ物心つかないうちに時世は急激に革まつた。領主と武士と町人と百姓との嚴然たる境界がみるみる取り除かれてゆきはじめると、その驚愕の去らないうちに、町人たちは新しい波に乗つて領主を侮辱しはじめた。殿様が通れば土下座をした人達が、もはや土下座をしなくなつたばかりではなく、平

民には許されなかつた白壁の家を續々と建築しはじめたのである。この地方にただ一軒の白壁の家であつた久賀家は、新しく建つた大きな白壁の家々の中に見窄らしく包まれ、或る土木商人は數町にわたる海風壁さえつくつた。町人どもが、といういらした眩きが時義や祖母の口から洩れるようになった。時義は後に名を善助と改めた。これは父の遺言で、いかなる理由によるものかわからなかつた。或いは日清戦役の直前に死んだ父の單なる新しがりであつたのかも知れない。時義ばかりでなく、彼の弟たちも、遺言によつて時次を茂次平、時種を爲雄と改名された。父は息子の名を改めたばかりではなく、自分の末裔に一切武家風の氣取つた命名をすることすら禁じたのである。領主としての矜持を懷しむ時義には、善助といういかにも平民らしい呼名は不服でならなかつたのであるが、遺言を覆すことは出来なかつた。善助は金融業を受け繼いで、冷酷といわれた。しかしこのいつくくな善助は自分で曲つたことが嫌いだと信じ、名門の血統と誇りとを傷つけないことを終生の目的とした。彼を呼んで守銭奴であつたというものもあるようである。彼が久賀家の蓄財を減ずることをなにより恐れることが、彼を嚴格にし、彼を生來からの守銭奴のごとき印象を與えたのかも知れない。遊里に足を入れることを覚えて金を散じはじめた長男の友太郎を、彼は有無をい

わざと勸當した。放縱な長男はその時、父にむかつて、あなたも若い時にはその道に遊び、妓女であつた人を妻として居りながら、私が少し位藝者遊びをすることをそんなに喧しくいうほどのことはないでしょう、といった。それが父の怒りに輪をかけた。父はもとは藝者であつた現在の妻との結婚を、その時に考えたほど立派であつたとは思つていないからである。父の嚴格さと冷酷さとが子供たちにとつて悲しみであつたことを父は知らないわけではなかつた。彼は多くの家族たちの中にあつてしだいに深い孤獨に陥り、ますます金銭に執着した。長男は去り、次男は夭折し、中學を出るとすぐ千吉が東京に出奔してしまふと、ただ國藏ひとりが残つた。善助は自分の事業と矜持とは自分一代で終ることを覺悟した。それは小さい時から身體の弱い物思い勝な少年である國藏に、何も期待することが出来なかつたからである。しかしながら人間の性というものは、表面の色や形でははかり知れないものであろうか。もつとも脆弱に見えた國藏の心の中にもつとも激しい氣魄があり、始祖久賀筑前守時尙から一筋の川のごとく流れて來た正しい傳統の矜持がひそんでいたことを、父は諒解して涙を垂らしたのである。「お父さんは疲れていらつしやる。隱居して好きな小島でもいじつて居んなさい。あとは私が引き受けます。」

そういつたのは國藏が十九歳の時であつた。

この白面の金貸はそれから大人たちを相手として绚烂たる才能を發揮しはじめた。金借りが来る。長火鉢の前に端坐して相手をじつと見る。相手は鷹の羽の定紋のついた茶器を取り、出がらしの茶を吸りながらおどおどと金貸の顔を見る。昔、領主の前に膝まずいた町人たちの様子が丁度こんな工合であつたであらうか。借り手はしかしこの年若い物腰のやわらかい女のような金貸を見くびつてゐる。商談が成立し、借り手は素人を詐し終おせたような氣持でいそいそと歸つてゆく。借り手は少し位期限がおくれてもと考え勝である。するとたちまち期限の翌朝に、差押えの執達吏が玄關に現われる。抵當は流れ、あわてて利子を運んでも既にいかんともすることが出来ない。また不埒なたくらみをする金借りもあつた。饗應をした上に女をあてがつて籠絡しようとかかつた。しかしその常套手段はこの變てこな金貸にはさらに利き目がなかつた。この少年高利貸のために、多くの人達が商賣を駄目にし、家を潰した。

この後繼者の振舞を父は次第に苦しく思ひはじめた。一度は息子の申し出を涙を流して喜んだ父は、息子があまりにも自分に似ていることに恐ろしさを感じたのである。この矛盾した氣持の中で苦しんでいた善助は、或る時、貸借關係で抵當として入つた支那古代の佛像を馬車曳きが運搬して來た時にはじめて怒つた。それは藩政時

代から千海寺の寺寶として祕藏されていたもので、落魄した住職が何時か國藏から若干の融通を受けていたものであろう。鐘樓の改修と庫裏の増築とがなされた時のことらしい。金額は知れたものであつたが、宋時代のものだといわれる、その木彫の彌勒菩薩像は特に國藏が抵當として指定したということであつた。借用したのが小額であつた上に期限が半年もあり、返済出来ないなどは夢にも考えていなかつた住職は、いわれるがままにその貴重なる抵當を無造作に證書に書きこんだのである。千海寺は久賀家代々の菩提寺である。善助は國藏のやり方は正氣と思われぬと聲をふるわせて怒つた。しかし息子は柔和な笑みを浮かべて、規律を嚴守したまでであると述べ、その彌勒菩薩像を自分の居室に運んだ。印半纏を着た運送屋がそれを横にして運んだが、蟲が食つて腐蝕し乾燥した部分から銹屑のように白い粉が疊の上に落ちた。息子と孫との對談をかたわらで聞いていた祖母が、にじりるように這つて來て、その粉を掌にすくい、おしいたいて呟くようにお題目を唱えた。光線の工合でこの散り落ちる粉が、眼の薄い祖母の眼に光つて見えたのである。それから祖母はこの佛の粉をかき集め、頭陀袋の中に數珠といつしよに入れていつも大切に首にかけている。善助は息子にむかつて、お前は少し旅をして來なさい。若いお前にこんな仕事をさせたのは間違ひであ

つた。自分がもと通りやる、といつた。息子は、もうお父さんは年をとりすぎた、こんな仕事をすれば身體が駄目になるばかりだから、そんな心配をしなくともよい、私は旅などしたくない、と柔和な調子で辭退した。善助は自分ではまだ元氣のつもりではあつたが、そういわればもう古稀の聲を聞くのも遠いことではなかつた。腰こそ曲らぬが少し餘計歩いてもこたえるし、寒さ暑さには抵抗が薄らいですぐに風邪をひいたり、ひどい夏瘦せをしたりした。その上、この頃は少し喘息氣があつてぜえぜえと咽喉が鳴る。年齢をいわれると一言もなかつた。また國藏が決して自分を粗略にするわけでもなく、自分のために小鳥の餌などをわざわざ遠くまで買に行つてくれたりもする。善助はそれでも息子のやり口を氣がかりと思ひ、何か口實をつけて止めさせようと考へたが、檢べてみると、久賀家の一切の財産と事業とはもはや全く國藏の名義になつていて、今更どうにもならないことがわかつた。それはしかし別に國藏から術中に落されたというわけではなく、最初、息子が父の業を繼ぐといつてくれた時に、うれしさのあまり善助がそうしたのである。それがただ國藏によつて一層的確にされていたばかりであつた。善助は止むなく毎日を小鳥いじりで過し、國藏は白面の金貸として仲間うちからも恐れられた。千吉はそういう兄が奇妙でたまらない。小さい時から